

水平社運動における「アナ派」について

三 原 容 子

はじめに

1. 全水青年連盟結成と全水解放連盟の結成・解体の経過概略
 2. 問題1―なぜ「アナ派」運動の初期に大阪が加わらなかったか
 3. 問題2―平野小剣はどのような役割をはたしたのか
 - (1) 平野はアナキストだったのか
 - (2) 水平社運動におけるアナキズムの影響は平野によるのか
 - (3) 平野は本当にスパイだったのか
 - (4) 平野の除名は有効だったのか
 - (5) 全水解放連盟創立に平野は関わったのか
- さいごに

はじめに

一九二五年頃から始まった「アナ・ボル対立」を抜きにして全国水平社（一九二二年三月三日創立）の運動史を語ることはできない。全国水平社の活動家が、共産主義の影響の濃い「ボル」と、無政府主義（アナキズム）の影響の濃い「アナ」に分かれて対立反目し合い、その対立が、時には全国大会を解散に陥れ、内部の暴力事件を引き起こし、一九二九年に「アナ派」の「全国水平社解放連盟」（以下では「全水解放連盟」と略す、また「全国水平社」を「全水」、「県水平社」を「県水」とするなどの略称も用いる）が解体を声明するまで続いたとされている。

この問題について触れている先行研究は数多いが、「アナ・ボル対立」をテーマとしたものに秋定嘉和「水平運動におけるアナ・ボル対立について」、松浦利貞「水平社運動とアナキズム」、白石正明「初期水平運動とアナキズム」がある。秋定論文は「アナ・ボル対立を主として思想的側面に限定してさぐる」ことから、さらに合流にいたった理由を推定すること⁽⁵⁾を目的としているため、対象時期が一九二九年の「合流」(「全水解放連盟の解体」までとなっており、「合流」後の「アナ派」の動きについては「大阪の一部がアナ派、人間主義派として残存した」⁽⁶⁾程度の記事にとどまる。松浦論文は、秋定によって「筆者「秋定——以下、「」は三原による」とほぼ、同一の視点からアナ派の「全水解放連盟」批判の時期(一九三二年)まで論及している。⁽⁷⁾と紹介されているように、秋定とほぼ同一の視点で対象時期を解放連盟解体後にまで広げている。白石論文も、初期を中心としながら、一九二六年九月の解放連盟創立までを扱い、視点は前二者と類似している。

本論文はこれらの研究成果の上に立ちながら、両派のうちの「アナ派」に焦点を絞ることによって、「アナ・ボル」対立期の水平運動史のさらなる研究進展に資することを意図している。主たる目的は、「アナ派」に関わる歴史的事実を可能な限り、年代的に、内容的に確定することにある。対立状況の中で相手方を誹謗するために、意図的な、または非意図的な誤った情報が発信された。当事者の回想には多くの勘違い・虚勢・曖昧さが含まれている。また長年月を経た後の記述にはイデオロギー的偏向による解釈が多くまじり、一方、当時の報道にも混乱が見られる。⁽⁸⁾要注意人物に張り付いて大部分の集会状況を把握してはいたはずの官側の報告や裁判記録にも誤りは多い。特定の人物に関して、ある資料に記されているからといって、それが事実であるとは限らない。

そこで、誤りが含まれている可能性のある資料の山々の中から、それぞれの資料の性格を吟味しつつ、妥当と思われる事実を浮かび上げさせるために、先行研究の記述を含めて、今までに刊行された資料をできる限り集めて照合することに努めた。場所や日時がはっきりしていて、他の資料で裏づけられるものをほぼまちがいないとして採っていった。本稿では、すべての事柄について妥当な線を引き出したプロセスを説明することはしなかったが、なるべく資料を示すことによって、後の検証への参考としたい。

また、先行研究でもすでに若干試みられたことではあるが、水平社関係の資料だけでなく、アナキズム運動関係の資料の調査に努め、運動周辺のアナキストの行動を明らかにする資料をなるべく利用した。とは言え、新資料の調査を尽くせなかったのみならず、最新の研究成果にも見落としがあろう。今後も引き続き調査を進めるつもりである。

通史的な事実確定に加えて、これに伴ういくつかの問題を解くことが次の目的である。いずれも先行研究を読む際に疑問を感じていたもので

ある。

第一に、「アナ派」活動の中心地の変化についてである。一九二五年の全水自由青年連盟結成（まもなく全水青年連盟と改称）から、一九二六年の解放連盟結成に進み、やがて、解放連盟の重要な活動家である深川武（東京）・朝倉重吉（長野）が現実状況へ対応していくことにより、解放連盟が解体し、大阪の一部活動家が「アナ派」として残るといふ、よく知られた経過の中で、青年連盟時代の中心は関東・東海であったのに、解放連盟になるとそこに大阪・広島が加わる。そして最後に大阪が残る。なぜ大阪の「アナ派」は初めから参加せずに途中から加わったのだろうか。

第二に、第一の問題と関連して、当該地方に運動が存在した理由に関する疑問である。「アナ派」の中心地とされる地点を地図上に示せば、東か西かという単純な線引きでは捉えられない分布を示している。なぜそれらの地方で活動したのだろうか。しばしば持ち出される「アナ派」水平社運動における平野小剣（本名は重吉）の影響ということでは割り切れない問題である。平野はどんな役割をはたしたのだろうか。この際、平野はアナキストではないという宮崎晃「差別とアナキズム」の主張の是非もはっきりさせたい。

第三に、「アナ派」として残留した人々のその後の活動や、解放連盟解体声明後の「アナ派」水平社運動についてである。松浦論文が簡単に触れているものの、従来主としてアナキズム諸運動を研究してきた筆者にとつて、一九三二―一九三三年の農村青年社運動や、一九三五年の日本無政府共産党の活動における水平社運動について触れられることがなかったことに、物足りない思いがあった。「アナ派」の水平社運動は、かなり後まで続くのである。

主に広島・大阪・静岡・埼玉を舞台に繰り広げられる「アナ派」の活動を、一部アナキストの「掠」や、「やくざ」との関係をまじえて描きつつ、以上の三つの問題を解き明かそうと準備を進めていたのであるが、稿をまとめる最終段階になって、実証のためには与えられた紙数の数倍を要することが判明した。そこで今回は次のような構成とせざるをえなかった。

まず青年連盟創立から解放連盟解体までをたどったあと、第一の問題（なぜ「アナ派」運動の初期に大阪が加わらなかったか）を検討する。次に第二の問題の中で、主に平野に関する問題（平野小剣は「アナ派」の運動にどのような役割をはたしたのか）について取り上げ、その際にごく簡単に各地で「アナ派」の活動が盛んになった理由に触れる。解体以後についての第三の問題は、先行研究がないことから多くの紙数を要するので今回は全面的に割愛した。

1. 全水青年連盟結成と全水解放連盟の結成・解体の経過概略

青年連盟から解放連盟までの流れを確認しておこう。

一九二二年三月三日全水創立の翌々年、一九二四年一〇月に明るみとなった遠島スパイ事件を機に、一二月一―三日の府県委員長会議（当時一般に「大阪会議」と呼ばれた⁹）で、「同和通信」の遠島哲男と近いとされた平野小剣の除名、南梅吉の委員長辞任などが決定された。一九二五年一月、大阪会議に承服しない南は、委員会を招集する（京都会議・名古屋会議）。南も平野も大阪会議は一部の者たちによるものであるとして決定を認めず、また水平社同人の中にも認めない者が多く、二人はその後も、各地の水平社での講演や大会へ参加した。

一九二五年四月一七日、関東青年連盟が創立された。一月の世良田事件の解決の際に関東水平社の一部幹部（村岡静五郎・宮本熊吉・栗原積ら）に融和的な行動、義援金の不正使用疑惑があり、平野小剣・沢口忠蔵らによって創立されたのである。ここには関東一円と静岡、のちに長野が加わった。五月の第四回全水大会（大阪）には「関東青年連盟」からも役員が出ている¹⁰。

一九二五年五月一五日（または八日¹¹）、名古屋の愛知県水本部で自由青年連盟が創立された。機関紙「自由新聞」の見出しは「自由青年同盟／大連合なる」とあり、本文でも六月中旬に「連合大会」予定、と「連合」の文字を使っており、¹²「全関東青年連盟」や「中部青年運動連盟」などの連合による創立ということであろう。二十余名が集まった。「自由青年連盟は自由青年連盟である」で始まるその「申合」は、神の被造物でもなく国家の成員でもなく「我等は我等である」と繰り返す「自由人連盟宣言」（一九二〇年¹⁴）を下敷にしたと推測される。自由人連盟は加藤一夫を中心とするアナキストの団体であった。しかしながら、後述するように、この時期の水平社内での対立図式はまだ「アナ派」と「ボル派」と二分できるところまでは至っておらず、そのため「アナ派」の団体と言いつけることはできない。時事新報記者の吉井浩存の「水平運動発達史」は、「この青年連盟は東海水平自由青年連盟の後を受けた水平社内部の反共産系青年の勢力を結成したものと書いている¹⁵。創立の翌月に発行された『自由新聞』創刊号に見られる支局所在地は、東京・京都・岐阜・愛知・静岡・埼玉・群馬・長野であり、のちに山口が加わる。この段階では大阪・広島は入っていない。

なお、同年七月七日の全水中央委員会（大阪）では、全水青年同盟の指導的立場にあり、後に部落民を詐称していたとして除名される高橋貞樹が専門部委員の一人に選ばれている。小山紋太郎によれば、一般民の噂がある者が専門部員に選ばれたことについて菱野貞次と小山が不審に

思い、その場で水平社同人であることの念を押し出した⁽¹⁶⁾。後に行われる青年連盟の高橋放逐運動のきっかけとなったできごとであった。

一九二五年一〇月一八日、自由青年連盟は京都市で第一回全国協議会を開いた⁽¹⁷⁾。出席者二四名か二五名のうち地元の京都が十二名、他は福井・奈良・東京・愛知・三重・岐阜・大阪・静岡・山陰である。平野小剣は決議の文面を作成するなど中心的な役割を担った。大阪からの参加者は下阪正英で、のちの解放連盟活動家は来ていない。他に決議事項の一切を承認する旨の電報や書面が、県水単位では、埼玉・岡山・広島・福島・長野から届いていた。広島ではこの頃ホルの無産政党化を否認する動きがあると「自由新聞」紙上に報じられている。

ここで決議された三項目は

- 一、全国水平社青年連盟は人類最高の完成のため一切の社会悪に対し徹底的礼弾を以て革正を期す
- 一、吾々青年連盟は水平社自治の革新を図り飽くまで人間礼讃の普及を期す
- 一、吾々青年連盟は純水平運動に排逆する主張行動に対し徹底的掃滅を期す

であり、創立当初以来の「人間礼讃」、「人類最高の完成」の精神を受け継ぐ「純水平運動」方針を示し、水平運動を共産主義運動に利用しようとする勢力に対する対決の態度を明らかにした。彼らの一掃しようとする「不純分子」とは、部落民を詐称する者や、水平社を背景に強談威迫の行動に出る者、水平運動を利用して日本共産党に迎合し労農ロシヤより金を貰って筋を売る者らをさしているという。五月に本部を名古屋としたのは仮の決定であったので、ここで正式に京都市と決められ、また、高橋貞樹は部落出身を詐称しているとして放逐すること（この問題は翌年二月二五日の全水第三回委員会（大阪）で再調査が決まり第五回大会で正式に決着）、他団体と混同されるのを防ぐためにつけていた「自由」の文字を団体名から削ることなども決められた。

この間、各地で青年連盟が創立された。静岡の川崎水平社青年連盟⁽¹⁹⁾、埼玉の大里・比企青年連盟⁽²⁰⁾、京都の東七条で青年連盟座談会⁽²¹⁾、愛知県水青年連盟⁽²²⁾、下関水平社青年連盟⁽²³⁾、京都の加佐郡青年連盟などが「自由新聞」紙面に見える。埼玉県水では一九二六年四月に二派に分裂し、一方が青年連盟を設立したと報道されている⁽²⁵⁾。全水青年連盟は一九二六年二月一日・二日に第二回協議会（名古屋⁽²⁶⁾）、三月一五日に第三回協議会（名古屋⁽²⁷⁾）を開いた。

一九二六年五月二・三日、青年連盟の多くの活動家にとっては遠く交通費のかさむ福岡で第五回全国大会が開催された。「無産階級解放運動主義」が優勢で、「純水平運動主義」の影がうすく、全体に「だれ気味」で、かえって小山紋太郎ら「アナ派」の発言が「一服の清涼剤」で

あると報告された大会である。⁽²⁸⁾ たしかに代議員の過半数が福岡によって占められ、綱領改正の件や、無産政党支持の件などの討議で、小山紋太郎や北原泰作らは孤軍奮闘の感がある。⁽²⁹⁾ ここで小山は「穢多と云ふ階級意識の下に進んで行く無産者であるから経済運動を加味せなければならぬことは勿論であるが、……何も好んで政治行動を採らないでもよいのであります」などと熱弁を振り、無産政党支持の件を審議末了に持ち込んでいる。⁽³⁰⁾ この時、後に大阪の解放連盟で活躍する石田正治・大西伝次郎らは栗須七郎らとともに「大阪府（本部）」の代議員として参加した。

一九二六年八月二八日、神戸の住吉で「水平社全国有志協議大会」が開かれた。渡部徹は『部落問題事典』の「全国水平社解放連盟」の項に、「全国水平社青年連盟を無政府主義的に純化するため八月二八日平野小剣らにより準備協議会が兵庫県で開かれ」たと記したが、おそらく「水平新聞」の記事によって書かれたものと思われる。⁽³¹⁾ しかし、個人名を掲出している新聞記事を見ても、当時の有名人である平野と南の名前は出てこない。決議内容を見ても反共産主義は強調されるが、自由連合主義や政党運動の排撃などのアナ的なところはない。また、八月二八日の「解放令」発布記念日というのは、当時の叛逆の士気の強いアナキストが選択する日ではないだろう。⁽³²⁾ 解放連盟は後述するように、明らかにアナキズム色の鮮明な団体であり、八月二八日の集まりは解放連盟とは無関係ではないだろうか。⁽³³⁾

この住吉での協議会を、「同愛」では「水平社内部」の「三つの思想的暗流」（日本共産党系の全水青年同盟・自由連合主義を強調する黒色運動（アナキズム運動）・「純水平運動」）の中の「純水平運動」の会合と見ている。平野らによる会合であるとする「水平新聞」の記事に対しては「折も折、共産党一派の新聞宣伝政策は例によってこの協議会を少しも関係のない南、平野等の陰謀だなど、巧妙に流言を飛ばしてゐる。それは、もしこの純水平運動が進展すれば、ダラ幹共産党一派の凋落を早めるからだとも伝へらる」と否定しているが、⁽³⁴⁾ そのように解釈したい。

一九二六年九月一日、解放連盟が創立された。従来日付については曖昧であったが、九月一日と確定してよいと考える。小山紋太郎の「全国水平社解放連盟解体について」の記述には他資料と突き合わせてみた時、いくつか誤りを発見するが、この日付に関しては、「大正十五年―昭和元年―九月一日、即ち関東震災三週年記念日、この記念日こそブルジョアジー及び反動団体に取っても記念ではあったが、又我々プロレタリアー解放運動者に取っても忘れられざる、あの天災地変のドサクサに……」として、「此の最も意義ある記念日をトして奮然として青年連盟の精算をなし⁽³⁵⁾」と大杉に関連する日として選ばれた由来を書いているので信頼できると考えるのである。もし大杉に関連する日でこの秋の創立であるなら、他に命日の九月十六日もありうるところである。後述するようにアナキズムの色彩の濃いメンバーによる団体であるから、選ぶとすれば、この二通りの日しかない。

加盟水平社は、一九二七年七月二五日発行の機関誌「全国水平新聞」創刊号によれば、長野、埼玉、東京、静岡、愛知、岐阜、京都、兵庫、大阪、広島、山口、各水平社有志となっている。⁽³⁶⁾しかし、結成時に大阪は出席できなかった。直前に行われた新堂水平社弾圧のためである。小山は「当時、関西（山岡「喜一郎」）では同志を糾合して先駆者連盟を結成すべき計画であったが、弾圧の爲め防げられていたので、人を以て之等関西の同志と連絡を取り……」⁽³⁷⁾と書いている。

解放連盟の綱領「我等は全国水平社の綱領を綱領とする」は、水平社創立時以来の精神を引継ぐことを明らかにしているが、標語の中に「我等は自由連合主義を基調とする」という文言があり、明確にアナキズムを掲げた団体であることが分かる。「自由連合主義」は当時、「無政府主義」「アナキズム」と同義語であった。はたして「部落問題事典」にあるように平野が中心人物なのかどうかについては後で検討する。

この後、各地で解放連盟が創立される。機関紙「全国水平新聞」には、京都の東七条水平社解放連盟、山口県水平社解放連盟、広島県水平社解放連盟、大阪府水平社解放連盟の各創立大会が報道されている。ほかに愛知の海部郡水平社などの単位水平社、群馬県水平社、長野県水平社、埼玉の入間郡水平社などの「全国水平新聞」に詳しく報じられている水平社は、解放連盟関係と見てよいだろう。⁽⁴⁰⁾また解放連盟はアナ系の労働団体と友好関係にあった。⁽⁴¹⁾一九二六年一月全国水平社労働党支持連盟が創立された時、東京の深川武は関東連合会本部の名前で声明を出すなどして労働党と全国水平社は関係がないことを力説し反「ボル」の姿勢を示している。⁽⁴²⁾

一九二七年一月五日、日本水平社が南梅吉の自宅で創立された。参加者には坂本清作・沢口忠蔵・川島米治・山口静ら、平野に近い関東の人々が入っているが、平野の名は出てこない。⁽⁴³⁾坂本英雄による団体系統表の分類や、全水本部の「日本水平社排撃声明書」（一九二七年一月二〇日）に、日本水平社創立当日の出席者として名前を挙げられた者のリストを照らし合わせても、平野、ないし関東の平野に近い人々の活動の性格はまだよくわからない。現段階では、解放連盟や日本水平社との関係については結論を保留したい。

一九二七年四月三〇日から翌日の未明にかけて、全国大会開催地変更運動全国協議会が川越市外野田水平社本部で開催された。⁽⁴⁵⁾参加水平社は東京（山田・深川ほか）・長野（成沢ほか）⁽⁴⁶⁾・愛知（水野）⁽⁴⁷⁾・静岡（杉浦）の水平社、群馬・大阪・山口（山本）⁽⁴⁸⁾・埼玉（藤岡・森ほか）⁽⁴⁹⁾・京都（梅谷）⁽⁵⁰⁾・三重・広島の水平社有志、事務所は原市水平社内、解放連盟の活動の一つであった。ここで次回大会を「名古屋で開催すべし」と決めた。結果的には、九月二六日の全水拡大中央委員会（大阪）で名古屋か広島かで抽選、広島に決定した。⁽⁴⁷⁾全国大会をどこで開催するかは、交通費や応援勢力の関係で、両派にとって重要な問題であり、前年に福岡で開かれて不利な立場にあった解放連盟は、今回は自派に有利な名古屋

を推したのであった。

この頃関東では、全水関東連合会の本部を熊谷から浅草の深川武方へ移すことを決めている（一九二七年七月一日全国水平社関東連合会（太田）⁽⁴⁸⁾）。これを深川らが平野と訣別した⁽⁴⁸⁾ことと捉える研究もあるが、第一回委員会出席者の顔ぶれを見る時、朝倉重吉・深川武・森利一ら解放連盟活動家以外に、平野こそいないものの、沢口忠蔵・辻本晴一・山口静・川島米治ら、後々まで平野と親しい人々が入っている（坂本清作は委任状、世良田事件以来平野らと対立関係にある村岡静五郎らが入っていない⁽⁴⁹⁾）。訣別と捉えてよいかどうか疑問が残る。

一九二七年一月三日・四日、広島で第六回全国大会が開催された。「融和時報」の井上哲男の「第六回全国水平社大会雑感」によれば、「夥しい祝辞祝電の中友誼団体のもの、披露の際それを迎へる拍手に二つの傾向を見うけたのであった。即ち所謂ボル系とアナ系がハッキリと夫々その思想傾向を臨は⁽⁵⁰⁾してゐた」という状況であった。アナ・ボル対立の様相が最も明確に現れた大会であった。

一九二八年五月二六日・二七日の第七回全国大会（京都）はボル派のみ参加の大会となった。「アナ派」は、大会前の中央委員会（京都）の通知が直前になされたこと、その委員会には一府四県（福岡・岡山・奈良・三重・京都）の出席者だけであったこと、「第五回大会を福岡に譲り第六回を広島に譲つて来た我々の名古屋開催説を蹂躪」したことなどを理由に不参加を表明した（以上の理由は「全国水平社第七回大会不参加に対する共同声明書」による⁽⁵¹⁾）。京都の解放連盟の梅谷新之助は大会二日目に突然「我々は本大会を認めない」と叫んで議場混乱、議事の途中で大会は解散となった⁽⁵²⁾。

一九二八年七月一日、第七回大会が中途で終わったため、府県代表者会議が奈良県高田で開かれた。ここでボル派が謝罪、階級闘争第一主義を批判し新しい方向を打ち出した「新運動方針書」が発表された。東京の深川武と長野の朝倉重吉はこれを受け入れるが、関西解放連盟の人々は拒絶し席を立つ⁽⁵³⁾。翌年の解放連盟内の解体賛成派と反対派への分裂がここで表面に現れたのである。

これを「無政府主義運動の分裂を反映したもの」（古賀誠三郎（大串夏身）⁽⁵⁴⁾）とする意見もあるが、アナ系労働組合全国団体である全国労働組合自由連合会（全国自連）の分裂をそのまま反映したものとは断言しかねる。一九二八年三月の全国自連第二回続行大会における分裂は、その後、更に続く混乱の時代の始まりで、以後「サンジカリズム」をめぐる論議が続くが、その後の深川や朝倉が、分裂の一方の側について行くわけでもない。むしろ松浦論文の「アナキズム運動にこだわり続けようとする人々と水平社運動の分裂の危機、アナキズム運動の分裂という事態の中で幅広い統一を指向した人々との対立としてとらえるべきではなからうか」の提言に同意したい。

一九二九年四月二日、平野小剣、坂本清作らは、関東水平社魁生連盟を創立する（太田町）。この創立によって「関東における水平運動は、全国水平社関東連合会（委員長深川武）、関東水平社（委員長村岡静五郎）、関東水平社魁生連盟（委員長坂本清作）の三派に分立することになった⁽⁵⁶⁾」とされている。南梅吉や埼玉の解放連盟の活動家藤岡亀吉からは祝電が届き、細川松之助・森利一・水野綏茂・清水弥三郎・沢口忠蔵らが参加した⁽⁵⁷⁾。すなわち解放連盟と平野らとの間に、友好的な何らかの関係があったことを窺わせている。同年二月二三日には全国水平社代表者会議が開かれ（熊谷）、深川武・朝倉重吉らを加えて戦線統一がはかられる。会長は清水弥三郎、書記長は深川、全水本部支持を決議した⁽⁵⁸⁾。

一九二九年一月二五日関西解放連盟は全関西協議会を開いて、一月四日の第八回全国大会を前に、全水に対して組織規約改正（自由連合組織とすること）と政治運動絶対反対の方針をとり、「解放連盟内部に巢食ふ不純分子及び日和見主義者を清算し絶縁する事」として、「近來解連内部に於て何らの定見無き浮動的日和見主義者横行し名を現実闘争に借りて解放連盟創立の主旨を曲解して逃避的態度に出て社会民主主義に墮せんとする一派が盛んに其毒素を撒き散らしてゐる、この際徹底的に清算する事に決定⁽⁵⁹⁾」、また「関西水平新聞」を極力支持して全国水平社を更生させることなどを決定した。語句に見るように、すでに解放連盟内の深川・朝倉は「不純分子」「日和見主義者」として清算の対象とされている。

出席者は三重・和歌山・広島・大阪・京都・兵庫の「各有志」とあるが、おそらく、「関西水平新聞」の関係者、すなわち編輯メンバー（梅谷新之助・岡田勘二郎・前川敏夫・山岡喜一郎・岩本秀司）と、地方事務所（三重県津市（前川方）・京都府（梅谷方）・和歌山（若松方）・神戸（米田方）、広島から大阪に来ている和佐田芳雄という、大阪の解放連盟を中心とする内輪の人々による会合と考えられる。のちに共に活動する小山紋太郎ら静岡の人々はこの時は出席していないようだ。

一九二九年一月四日・五日の全水第八回大会（名古屋）当日、解放連盟は解散し解放連盟協議会の名で「解体に関する声明書」を出した。⁽⁶⁰⁾「我等は水平運動現下の状態に鑑み、全国水平社戦線統一の爲め、茲に、我等の全国水平社解放連盟を解体す」とある。

小山は解散について、「此の際水平運動の挽回策として民主主義の旗を担がんとする関東の人々の現はれたる事によって、精算に次ぐに精算を以てされた解連は又も洗礼の時に会したのである。此処に於て全国水平社解放連盟は大英断を以って、鉄の如き堅固なる信念の下に新しい陣容を整へる爲め第八回大会を期して解体したのである」と、むしろ「アナ派」運動の純化進展のための一歩ととれるような書き方をしている。⁽⁶¹⁾

官側の資料が解体宣言を、北原泰作・山岡喜一郎一味が勢力の伸張を図った策謀と観測しているのは、解放連盟の新たな門出という意味で当たっているかもしれない。実際、その後も小山・山岡らによって「アナ派」の闘いは続くのである。「アナ派」の労働組合団体全国自連の「自由連合新聞」は、この頃の長野の状況を、朝倉重吉等少数幹部は墮落し、「我等自身の手により我等の解放をモットーとして政治の絶滅と万民自治の獲得とを本来の使命として戦へる一般社員は」自由連合主義による闘いをつづけていると報じた。⁽⁶³⁾

一九三〇年五月、小山紋太郎の文章、山岡喜一郎編で、大阪の富田林の荊冠旗社から「全国水平社解放連盟解体に就いて」が発行されるはずであったが、発行禁止処分を受けた。荊冠旗社は旧解放連盟の一部が結成した団体で、同人は、山岡喜一郎、小山紋太郎、河合信、村上（和佐田）義雄、松谷功、小林次太郎である。⁽⁶⁴⁾小冊子は「全国に散在する特殊部落民よ！」と呼びかけ、「……斯くして勇敢に進む事によってのみ我等は解放され、虐げられたるもの、のすべて——全無産階級全被压迫民衆——が「水平のよき日」即ち相互扶助の社会を礼讃する事が出来るのである。闘へ！ 闘へ！ 更らに又闘へ！」と結んでいる。

2. 問題1——なぜ「アナ派」運動の初期に大阪が加わらなかったか——

後に大阪で「アナ派」として活動する人々に石田正治・山岡喜一郎・大串孝之助・松谷功らがいる。石田は木津水平社の創立者、山岡は和歌山の出身で新堂に移り住んだ。大串は部落出身ではないが、新堂に住みつき活動した。松谷は新堂の出身者である。いずれも新堂水平社（旧河内水平社、現富田林市）を拠点として大阪の地で「アナ派」としての独自の活動を行なった。しかし彼らが水平社運動における「アナ派」として登場するのは解放連盟創立直前（一九二六年夏）以後である。それまでは姿が出てこないどころか、石田らは反南・平野の立場で動いている。それはなぜだろうか。

結論を先に言えば、解放連盟創立以前の、青年連盟時代の対立は、アナ派對ボル派という図式に加えて、「南梅吉支持派」対「栗須七郎派」の図式があり、むしろ後者の方が重要であったからである。当初は「南派」対「栗須派」が重要であったが、次第に「アナ派」対「ボル派」が重なり、比重を増して行ったということになる。「大阪会議」にも二つの対立軸がからみあっていったと思われる。

南派と栗須派の内訌に関しては、当時もよく知られていた。二人は共に全国を駆け巡って水平運動のために尽くしたが、性格が異なり、互いに感情の疎隔が生じ、周辺の関係者も、ある者は南の肩を持ち、ある者は栗須のファンであるというように、対立の様相を呈したようである。

内訌を指摘する時事新報記者の吉井浩存は、南が、自らの財産を投じた上でさらに実際問題として運動を維持して行くために「兵法の正道を墨守するに堪へず、……或は当路の大官に陳情もし、或は社会の識者と交驩もした。横田千之助氏や有馬頼寧氏、乃至は遠島哲男氏などに近接する必要も感じ、その知遇に感激もしたであろう。南委員長の人柄から察すれば、亦た相当理由ありと言はねばなるまい」と同情的に描いている。一方の栗須に対しても「潔癖一途で「聖人」肌の栗須氏なぞから見れば、自律的、決死的、真剣であるべき水平運動に、かような局外宿怨の輩と情実をつくることを屑しとし得ない。……その不満も亦た、あながち情状酌量を忘れた態度とのみは言ひ難い」と理解を示している。⁽⁶⁵⁾

両派の分布は東西に二分できるわけではないが、関東で積極的に活動した平野が南と行動を共にすることが多かった関係からか、東日本では南派が多く、関東の機関紙「関東水平運動」「自由」では南の肩を持っている。地元の大阪で栗須を中心に行発された「水平線」「西浜水平新聞」「大阪水平新聞」は栗須派であった。大阪のこの三紙は、いずれも新堂の献身的な活動家北井正一との関係で、のちに「アナ派」の拠点となる新堂に発行所を置き、事務所を栗須の根拠地の西浜に置いていた。一九二五年から一九二六年にかけて、石田正治は北井・栗須とともに「大阪水平新聞」の同人となっている。新堂の松谷らの文章が掲載され、新堂の情報が詳しいのは当然であった。以下では、いくつか、対立の様相の例を見ておきたい。

一九二四年三月の第三回全水大会で、南が議長、栗須は副議長となるよう推されたが、栗須は承知せず、理由を聞かれて「自分は表面に立つて働くことはいやだ自分には別に働く事がある自分は別に生命を賭して働くべき仕事を持つてをるのだ」と述べたという一幕があり、また、栗須の西浜水平社の提案で「中央執行委員長及び中央執行委員を連盟本部員に改称するの件」を出し、採択にあたって議場混乱という一こまもあった。⁽⁶⁶⁾ 吉井は、西浜水平社の「提案の動機が南委員長排斥にありと見て反対する向きも多く、議論沸騰して結局裁決不能となつた」と解釈している。⁽⁶⁷⁾

同年秋、遠島スパイ事件が起った頃、「東京朝日新聞（群馬版）」は群馬の小林綱吉の動きを報じた。南と平野、殊に平野は遠島と深い関係にあるから、これを機に南にかわって栗須を委員長にしようとか各地の同人に檄をとばしているというのである。たとえ平野を処分し平野が反旗を翻しても「殆ど全国的に栗須氏の傘下へ集ま」と小林は考えているという。内容の真否はともかく、小林は栗須派だったようで、対立が窺える記事である。

栗須に対する批判の記事は少なくない。一九二五年初め、三重の「聖戦」は、南を「水平運動の恩人」とたたえ、南を闇に葬った売名的な栗

須とその「信者」を批判している。⁽⁶⁹⁾ また同年二月の関東委員会（熊谷）で「栗須君の書籍を無理無体売りつけると喧しく伝えられてゐる埼玉の宮本熊吉」と、平野・沢口らが対立したことを「自由」が報じた。⁽⁷⁰⁾ 五月には第四回大会の前日の「親睦会」で、「親睦会、懇談会、まさに終りをつげんとしたとき遅れて出席した栗須七郎氏は旧本部長正列の前に来り、何かくどくどしく言つて居つたが、参加者のうちの人々はそのこととの余りに見すいた芝居が多いのに野次と冷笑を浴びせて引込めたのは、親睦会席上の余興であつた」と、「自由新聞」は栗須に対して冷ややかな表現をしている（小山紋太郎筆）。また、四月の香川県水大会、六月の兵庫県飾磨郡大会での南・栗須同席の集りの際のエピソードとして、栗須の不遜な態度が「自由新聞」で非難されているし、奈良の五条町の「新聖潮」は一九二六年九月に栗須が熊谷で「鮮人のくせに生意気だ」「俺は関東水平社の執行委員長だぞ」と発言したことを紹介している。⁽⁷¹⁾

大阪の石田らが大阪発行の新聞に関係し栗須と共に行動したからといって、そのことが「アナ派」と対立する青年同盟Ⅱ「ボル派」にくみしたことはない。二つの対立軸は一応別の問題である。そもそも初めのころは、まだ青年同盟には「ボル派」的色彩が強くなかった。たとえば、一九二四年夏、平野小剣も駒井喜作も、まだ青年同盟を「ボル派」Ⅱ敵と見なしていないし、青年同盟の活動にはボルの面よりもむしろ幹部専横反対の側面が強い。すなわち、一九二四年四月、米国の排日移民法問題で、阪本・米田・平野は上京して米大使に警告文を手交し、大阪天王寺公会堂で対米問題全国水平社大会を開いたが、その際の決議文や宣言には「全亜細亜民族」云々の言葉が盛んに使われていた。⁽⁷²⁾ 青年同盟はこうした行動を一部幹部が独断で行なつたこと、行なうことができるような組織形態になつていないことに不満の声をあげた。⁽⁷³⁾ 創立以来の幹部以外の青年たちにとって、共感できる異議申立てではなかつた。

いわゆる「アナ派」「ボル派」の対立が明確になつてきたのは、一九二五年五月の第四回全国大会から七月にかけてのことであつた。大会における普選（政治行動）に対する態度如何の討議で賛否両論がぶつかり、結局保留になつてゐる。なお、この時平野は、普選は民衆を解放しないが、「諸君は自由に選挙権を行使してもらいたいのである」と述べるが、選挙を完全否定していない。⁽⁷⁴⁾ 七月の第一回中央委員会（大阪）では、政党問題については個人としての参加を認める程度と決着を見た。このころから、青年同盟は政治運動参加を主張し、「青年同盟以外の同人の多くは、第一政治運動に参加することは水平運動の根本を墮落するものである、第二政治行動によつては解放されるものではない」という風な理由でその無産政党化を否認して居る」という対立的な状況になつていく。⁽⁷⁵⁾ しかし、前述したような南派・栗須派の対立も、濃い影を落として行く。「アナ・ボル」の対立が激しくなる一九二六年夏になつて、大阪は「南・栗須」問題とは無関係に「アナ」として登場するのである。

3. 問題2——平野小剣はどのような役割をはたしたのか

『部落問題事典』の「平野小剣」の項には「全水青年同盟や全水無産者同盟が階級闘争に進出するとアナ系と全国水平社青年連盟・全水解放連盟の結成に関係した⁽⁷⁹⁾」と書かれている。また「全国水平社解放連盟」の項に「主要メンバーは平野・朝倉重吉……⁽⁸⁰⁾」とある。平野は「アナ派」の活動における重要な役割を果たしたと長く考えられてきた。長野県水平社研究において、全県的にアナ系が強かったのは、平野―朝倉重吉の線でアナキズムが影響したからだとされている⁽⁸¹⁾。愛知県水平社運動に関する研究では、一九二六年九月の結成に際して「我等が解放連盟を組織するに当り、各地から平野小剣君との関係の有無の問合わせがありました。我水平社解放連盟と同君とは何等の関係も無き事を茲に声明する⁽⁸²⁾」と声明がだされたことについて、「この声明は誰も信用はしなかつただろうし、またことさらそのことを強調すること自体、黒い一本の糸がどこかにつながっていたは誰の目にも疑うことはできなかっただろう⁽⁸³⁾」と、解放連盟と平野との関係を疑わない。

このように、しばしばアナ派の活動における平野の重要性が述べられるが、はたして平野はそのように大きな役割を果たしたのだろうか。宮崎晃は「差別とアナキズム」において、平野小剣アナキスト説の主な問題点を「ひとつは、平野はアナキストだったのか。もうひとつは、伝説となっているように、水平社運動にアナキズムをもちこんだのは、平野小剣なのか、という点である⁽⁸⁵⁾」と述べ、多くの紙数を費やして二点の否定に努めているが、これには秋定論文などで批判がなされている⁽⁸⁶⁾。しかし、戦前長期にわたってアナキズム運動に関わり「農村青年社」の理論的支柱であった宮崎の研究は、知人の書翰などが多数利用されており、同時代のアナキストならではの類書のない貴重なものである。本論では、今一度、同じ問題を取り上げようとするものである。

問題を四つにまとめ、(1)平野はアナキストだったのか、(2)水平社運動におけるアナキズムの影響は平野によるのか、(3)平野は本当にスパイだったのか、(4)平野の除名は有効だったのか、(5)解放連盟創立に平野は関わったのか、の順に述べていきたい。

(1) 平野はアナキストだったのか

アナキストであるかないかは、特定団体への加盟の有無によって決まる問題ではなく、自称・他称でずれる場合が多い⁽⁸⁷⁾。特にアナキズムのよ
うな、特定の根拠文献がなく、「マルクス主義ではない」「反議会主義」「反中央集権」「反強権」などの否定形で述べられるような思想の場合、

周囲がどう見ていたか、本人はどう思っていたかを論ずる以外に当否を判断することはできない。平野に対する周辺の見方を検証してみよう。

平野がアナキストと見られた最も大きな理由は、平野が関わっていた労働組合「信友会」がアナルコサンジカリズムの代表的な組合であったことによっていると思われる（一九一八年一月活版工組合「信友会」創立、まもなく「日本印刷工組合信友会」と改称）。労働運動史上「信友会」は、サンジカリズム、自由連合主義の代表的組合とされてきた。しかし、一九一九年頃は「いわゆる経済的運動派一本にまともっていたわけではなく、厚田正二、入沢吉次郎、野村孝太郎、平野重吉などの普選派もあった⁽⁸⁸⁾」というように、平野は信友会の中の「普選派」として有名だったことを忘れてはならない。アナキズムの代表的な雑誌「労働運動」は平野について、「平野重吉君。立憲労働党創立当時から入沢君の親友で、同じ三秀社に文選工として働いてゐる。昨年来、新人労働会の研究会に出席して、熱心に労働問題を研究した結果、君の持論なる普選選挙に関し、多少疑問を抱くやうに成つたとも聞いてゐる。が兎に角現在は普選の主張者として入沢君にも勝る雄弁家⁽⁸⁹⁾」と紹介している。「アナ・ボル」対立の時代、労働運動社を中心とするアナキストたちの多くが、平野を「アナキスト」とは見なしていなかったのではないだろうか。平野の出身地、福島庄司吉之助の評価をしてみよう。庄司は一九二四年当時「自由」の福島支局となっている⁽⁹⁰⁾、福島県水平社創立関係者であり、一九二七年には農民自治会の全国連合委員であった。当時日記をつけていた。

一九二三年六月四日―六日の三日間、福島民報の文選工だった庄司は平野に会った（この時福島へは法要のために帰省したらしい⁽⁹¹⁾）。二日目に「人が話をすると、たえずあたまをふるようになつてうなづく、人づきのする男だ、アナキストの典型的人間だ。なかなかやり居る⁽⁹²⁾」と日記に書き留めた。三日目、ともに本屋へ行き、平野は大杉栄・伊藤野枝の「二人の革命家」を買った。当時広く読まれた本であるから、購入はアナキストの証拠にならないが、少なくとも大杉らに反感をもっていたという事はないようである。一九二五年六月にも平野に会い「相変わらずニコニコ顔だ。こんどは新妻をつれて来た。大変喜んでゐた。政治研究会の連中であつて政治運動否定論をきかしてやるか、皆んなあつまつて話しをしてみたい⁽⁹³⁾」(前年、平野は辻本晴一の義理の姉と再婚している)と平野の言葉を書きとめた。平野をアナキストを見ていたのである。庄司は後年「当時アナキストと思つたのは印刷工のうちには大杉栄の影響多く、私は「パンの略取」をひそかに東京で手に入れ、また平野との接触でも、そう感じていた」と述べている。

一九二四年三月の第三回大会の際、堺利彦は平野を「古くからの労働運動者であつて、信友会に属する印刷工であつた。思想上から云へば、アナキスト系の人であつた⁽⁹⁴⁾」と書いた。「アナキスト」でなく「アナキスト系」とあるが、一応、アナキズム陣営外から「アナ系」に見られた

ことになる。また、一九二五年『中国評論』では平野を高く評価し、「体は小さくして精神にして信念の強い印刷工より身を起してアナキとして確念を把持する平野小剣氏⁽⁹⁵⁾」としている。やや曖昧な表現である。

少ない事例から判断することは危険であるが、平野小剣はアナキズム運動外の人々からはアナキストないし「アナ系」と見られており、労働運動社などアナキズム陣営の中にいる者からは、仲間とは見られていなかったのではないかと推測される。一貫してアナキズム陣営の中で生きた活動家であった宮崎晃がアナキスト説を否定したのはもっともである。なお、後に国家主義的な活動へ向ったことは、アナキストであったか否かとは無関係であることを断っておきたい。多くの共産主義者が転向したように、アナキストの多くも、さまざまな進路を歩んで行くのである。

(2) 水平社運動におけるアナキズムの影響は平野によるのか

戦後の座談会で西光万吉は、加藤一夫（前述の自由人連盟中心人物、後に「農本主義」へ進む）と「仲がよかったね？」と難波英夫に聞かれて、「私の親しくしていたのはアナの岩佐「作太郎」ですよ」と答えている。岩佐は大杉死後のアナキズムの中心的な人物のひとりである。このとき阪本清一郎は大杉栄と山川均の名前を挙げた。⁽⁹⁶⁾ 当時の官側の資料でも、駒井喜作「……大杉栄、堺利彦、賀川豊彦等を崇拜す」、清原一隆（西光万吉の本名）「……絵画研究中、社会主義に感染し近時、無政府主義を説く……」などとアナキズムの影響が窺われる記述となっている。⁽⁹⁷⁾

水平社創立当時、創立メンバーの中にアナキズムの影響が強かったことは、当時の思想状況・運動状況を考えれば、まったく当然のことであろう。水平社の創立前後の一九二〇年から一九二三年頃は、アナキズムやアナルコサンジカリズムがもっとも盛んな時期であった。綱領中に、解放は「部落民自身の行動によつて」とあるが、労働運動界で盛んに叫ばれたサンジカリズムの「労働者自身による」運動の強調と同様の気運によるものであろう。社会運動の実際の場合における優勢だけでなく、大杉栄やクロボトキンの文献が広く読まれた時期でもあった。⁽⁹⁸⁾ 大杉の文章は読みやすく、岩佐の語り口はわかりやすく、いずれも大きな影響を青年たちに与えた。

信友会における普選派であった平野も、当然大杉の本を読み、岩佐作太郎らの主張を聞いたに違いない。平野小剣というひとりの人物が広めずとも、水平社周辺の青年たちにはアナキズムの思想に触れることが珍しくない時代であったことを忘れてはならない。それにしても、これほどまでに平野の役割が大きく見なされるのは、やはり全水創立後の四年間、すまじいまでの行動力で福島から九州まで全国各地の大会・演説会

のほとんどの顔をだし、ペンをとる暇もないほどであったこと、創立時幹部の中の唯一の関東出身者であることが影響しているのではないだろうか。

ここでは、「アナ派」の強かったいくつかの地域で、アナキズム普及に平野の役割が大きかったのか、それとも平野とあいまって、または平野と無関係に、アナキズム普及の原因があったのか、西から東へと順に、ごくごく簡単に眺めておきたい。

広島で忘れてはならないのは八太舟三の果たした役割である。明治学院中退、神戸神学校卒業後牧師となった八太は、一九二〇年に広島市中心部にある組合教会に赴任してきた。初めのころは説教上手で信者を引き付ける牧師であったが、次第に社会問題への関心を深め、やがてアナキズム思想を説くようになり、若い信者や教会外の青年に影響を与える一方で、古くからの信者や教会側との関係が悪化し、結局は教会を追われることになる。⁹⁹八太は、広島尾長（広島県解放連盟を創立した地）方面へも「伝道」に來たという。「アナ派」の水平社運動の活動家として、のちに農村青年社の活動家として行動した和佐田芳雄（村上芳雄）は小学校在学中から影響を受けたひとりである。また八太は、一九二四年九月から教会で「労働問題講習会」（二期（九月より）は六〇―七〇名、二期（一月―）は三〇名ほど）を開催して、ここから後に広島労働運動で活動する佐竹新市、水平社の活動家白砂春一らが育って行った。もともと、佐竹はかなり以前にクロボトキンを読んでアナキズムに触れ、上京して大杉のところを訪ねたこともある。大阪の解放連盟の「民衆の中へ」に書いた加藤稔¹⁰⁰もまた、八太の影響を受けたアナキスト歌人であった。

しかし、広島「アナ派」の動きにおける八太の役割を過大視してはならない。八太は広島に着任してから、いわば広島在住のアナキストたちに育てられたようなところがある。教会で講習会が開かれる以前から、広島市・呉市において高橋彰三、丹悦太、弘中柳三らの活動があった。また彼らが活動を始めたのは一九二〇年二月の日本社会主義同盟創立頃からで、東京や大阪から演説会にやってくる主義者の主張を聞いたり、上京の折りに影響を受けてのことだった。人数の多寡はともかく、演説会・ミーデーなどにおけるアナキストの活発な活動の上に広島「アナ派」の水平運動はあった。広島県東部の福山・府中方面の「アナ派」の中心であった山口勝清もまた、上京中にアナキズム運動に触れ、しばらく静岡県清水市で新聞記者などをしたのち、一九二六年末に帰郷する。

大阪では石田正治・大串孝之助・山岡喜一郎・弟の山岡栄治らが主たる活動家であるが、大阪における「アナ派」の土壌としては、まず水平社創立に貢献した木本凡人の名を挙げるべきだろう。広く社会運動への理解を示していた彼であるが、一九二二年の日本共産党結成頃からはア

ナキストが寄る拠点となり、逸見直造とともに、大阪をアナキスト活動の土壌とするのに貢献した。

石田は既述のとおり、栗須と共に大阪における機関紙発行にかかわった人物であるが、水平社創立以前から大阪の地でアナキストとして活動していた。のちに新堂に出入りし、新堂では「大阪の米騒動を指導し水平運動のオルグにきていた」と回想されているから、米騒動の頃から活動をしていたのかもしれない。一九二二年六月、反軍ピラ事件、過激思想軍隊宣伝事件と呼ばれる事件が起った。石田正治・大串孝之助・後藤謙太郎（のちに獄中で自殺したアナキスト詩人）らが岡山や新潟の新発田で反軍ピラをまいて逮捕され実刑を受けた。一九二二年七月に大阪府内で初の水平社（河内水平社）が新堂に創立された時は、石田も大串も獄中であった。

出獄後、二人は労働運動社や農村運動同盟（いずれも当時の代表的なアナキズム運動団体）の関西支局を手伝ったり、二人で「関西抹殺社」を組織して「掠」をしたりした後、石田は一九二三年四月、木津水平社を創立する。官側は「在京在阪無政府主義者ト交際アリ主義宣伝ニ従事モノ」と把握していた。また大串は一九二五年に新堂に住所を置く「文明批評社」で「祖国と自由」を発行するから、この頃新堂に移り住んだと推測される。おそらく水平社運動に献身し、広くよそ者を受け入れた材木商北井正一を当てにするかたちでやってきたのだろう。昭和初期の新堂地区を再現した地図には「大串」「大串の広っぱ」と書かれており、また、のちに新堂水平社が弾圧された際のことを当時幼かった少年に「大串くんの奥さんの名前がおケンさんいうて……」と回想されているところを見ると、すっかり新堂の地に定着していたと思われる。

一九二六年八月の大阪府水委員会では、石田が議長をつとめ、山岡喜一郎（この頃から新堂在住らしい）が理事に選出され、石田は関西連合会委員の次点であった（大串は部落出身ではないから役職と無縁である）。地元の有力量の息子松谷功を加え新堂の運動がいよいよ軌道に乗り、解放連盟結成へも参加しようとする時、三〇名が検束されるという大弾圧が下ったのであった（「川上村事件」、容疑そのものは冤罪である。北井正一・石田・山岡・大串は六ヶ月／八ヶ月の判決が言渡され、翌年五月まで獄中にあった）。出獄後すぐに大阪府解放連盟が創立されて、各地の運動への応援、出版などの活動が再開される。

静岡では、全水の役員もつとめた小山紋太郎の活動がめざましいが、静岡県も一九二〇年代にアナキズムの活動が活発だった土地である。

一九二五年六月発行された『自由新聞（静岡）』は、周知のように島田町の資産家加藤弘造氏の経済的援助によるところが大きい。加藤弘造は水平運動のみでなく、アナキストにとっても重要な援助者であったらしい。一九二六年アナキストたちは静岡・清水・島田・浜松・豊橋・名古屋・岐阜などで連日のようにアナキズムの演説会を開催した。この時の資金を（一部であるか全額であるか不明だが）加藤弘造が出した模様

である。東京や埼玉や地元のアナキストを弁士に、ある町では数百名の聴衆を集め、ある町では検束から乱闘となり中止という状況ですすめられた。⁽¹⁰⁸⁾

演説会期間中に関する回想の中で、大宮のアナキストで水平運動にも深い関係のある望月辰太郎が演説会の下準備のために来たのは「加藤弘造氏に、新聞発刊の保証金を出してもらう用件を兼ねておられたらしい」、「望月さんも、加藤弘造さんとの交渉もうまく進んだらしく大宮へ帰られた⁽¹⁰⁹⁾」とあり、またおそらく一九二六年のことであるが、仲間の「出獄祝を静岡市七間町の岩井屋というそば屋の二階で島田市の富豪・加藤弘造の援助で、大勢集まってやったことがある⁽¹¹⁰⁾」という。

この連続演説会は水平運動と重要な関わりを持っていた。弁士の顔ぶれはほぼ同じアナキストたちであるが、主催者は平等新聞社あり、解放連盟あり、東海黒色青年連盟ありとさまざまで、アナキズム運動と水平運動が渾然となっているのである。

もちろん、連続演説会は経済的な援助だけでは開催不可能である。静岡一帯でアナキストの活動があったからこそ人脈もあり演説会も可能となったのである。一九二六年一月の東京における黒色青年連盟の結成を受けて、四月には静岡で「東海黒色青年連盟」が結成され、沢田武雄（のちに広島福山へ移動）や牧野修二らの活動が、水平社や、浜松の印刷工にまで影響を及ぼして行ったのであった。

埼玉は一九二七年四月に全国大会開催地変更運動全国協議会が開催された地である。事務所を担当した原市水平社は一九二四年に大宮に永住したアナキスト望月辰太郎と縁の深い地であった。望月辰太郎は部落解放運動のための「無差別社」を創立、「無差別」を発行したり、演説会を開催している。望月が一ヵ月ほど留置されていた時、残された者たちが食いつなげるようにと、原市の水平社から「乾うどん」が二箱届いた⁽¹¹¹⁾。一九二九年に町会議員選挙に出た時も、ポスターを買う金もないが、「食糧の方は、原市の方から米が俵で届くし、醤油だの野菜だのって沢山届くんで、一銭も金が無くともどうにかあった⁽¹¹²⁾」というエピソードがある。

一九二一年に蓮田にアナキストの農村運動団体の小作人社が設立されて以来、埼玉はアナキストの種が蒔かれた地方であった。設立当初はアナキズム運動と親密な関係にあった農民自治会が、埼玉で盛んに活動を繰り広げられたのも、単に渋谷定輔の存在故ではなかった。アナキズムの土壌の前提があった上にこそ、御正村の水平社の水野綏茂が「御正村の小作争議に、望ッチャンの小作人社の同人が、積極的な支援を惜しまなかった⁽¹¹³⁾」と語るような水平運動とアナキストの結びつきがあったのである。

長野に関しては朝倉重吉と平野との関係について一言論じておく必要がある。朝倉について、「全国的ニ知ラルル水平運動ノ闘士ニシテ、

特ニ警視庁編入特要甲号平野重吉（小剣）ト親交関係アリ、其ノ結果平野ハ屢々来県、水平運動ノ助勢ヲナシツアルモノニシテ、今期間ニ於テモ来県ノ上、講演会ノ応援弁士タル事五回ニ及ビ⁽¹⁴⁾と官側報告に書かれたことが、後に続く「又無政府主義系ニ属スル警視庁編入特要岩佐作太郎ノ一派、乃至ハ埼玉県編入特要望月辰太郎ノ一派ハ、二、三名ノ同志ヲ率ヒテ本年四月及九月ノ二回ニ涉リ来県」の部分以上に重視されて、平野との関係が過重視されているように思われるからである。

明確な反証材料は今のところないが、東京生活を経験した朝倉重吉のこともあり、当時の時代状況からは、一人の人物に原因を収束する必要はないことを再度強調しておきたい。また、宮崎晃は、長野県の活動家高橋市次郎から次のような回想を得ている。「朝倉は上京しても平野のところには行かなんだ。また、演説会などで、ふたりがならんでいても、べつにしたしげにことばをかわす様子は見かけなかった。震災のとき、上田にいた高倉テルは知人を心配して上京したが、朝倉は行かなかつた。そんなつきあいの知人は、東京にはいなかったと思う。のちには、朝倉は、東京府水の深川武さんとは親密でした⁽¹⁵⁾」。

(3) 平野は本当にスパイだったのか

スパイ問題についての真相を完全に究明することは難しいだろう。創立以来、南らとともにしばしば上京して大臣を訪問したりすることの多かった平野は、有馬頼寧・遠島哲男ら、さまざまなたとの交渉があったと想像される。しかし、本人が「私は、私に対する一切の疑念、嘲罵、冷笑、毒舌を甘んで男らしくうけておくことにしてゐる⁽¹⁶⁾」と釈明しないからといって有罪ときめつけてよいものだろうか。「遠島哲夫⁽¹⁷⁾がスパイであることが発覚したとき、その彼とそれまで親しくつき合い、時には情報を流していた平野小剣や南梅吉の責任は鋭く問われなければならぬはずである⁽¹⁷⁾」と、今なお書かれるが、平野の有罪説には疑問がある。

当時、平野は小山に、松本源太郎に関する情報を流した疑惑について、次のように釈明したという。「遠島哲男が、なんだあの男は、あんな小汚ない格好をして？」とぼくにたずねたので、かれは誇大もう想の精神異状者なんかで徳川暗殺にやってきたと、大きなことを云っているがつじつまの合わないことを言っておるので、可哀想でもあるので君たちが、そんななりで徳川の傍に近寄ろうと思ったところでぜったいに来るものではないから、とさとして、わずかだが旅費をやって帰えした⁽¹⁸⁾。」と遠島に話したまでだ⁽¹⁸⁾。

吉井浩存は遠島スパイ事件について、「その真相に通ずる自分なぞから見れば、実はその十の八九が虚構誇大の憶測であり、吏僚の反目がた

またま機会をこれに藉つて露出したに過ぎないものであるが、……水平社の内部、殊に青年同盟一派からは、遠島と深い交誼のあつた南中央執行委員長、平野小剣、米田富の三氏に対する非難詰責の聲が旺然として湧いた」、弁明の余地もあつたらうし、遠島の誠意に対する情誼も忘れ得なかつたらうが、南も平野も終始沈黙を守っていた、そのため却つて不純分子と見なしてしまつた者も少なくないと、南・平野の「遠島の誠意に対する情誼」による沈黙を指摘している。さらに、逆に南梅吉が大阪会議に従わなかつた際に、大阪会議の側が抗弁しなかつたことをとりあげて、「却つて、全国各地に於ける南氏を敬慕する人^(マツ)だちが同氏擁護の声をあげ、青年同盟に對抗して、東海水平社自由青年連盟の結束をさへ行はれたのである」と論じた。⁽¹⁹⁾

ここでは、南派と栗須派の対立、さらには普選への対応をめぐる「アナ派」と「ボル派」の対立の中で、当時真相がつきとめられないままに、やがて「ボル派」の視点を正しいとする研究が盛んになるにつれて、平野有罪説が一般的になつてしまつた状況に対して、大きな疑問符をつけてつぎの問題に移りたい。

(4) 平野の除名は有効だったのか

平野は一九二四年一二月初めの大坂会議で除名となり、さらに群馬県水平社からも除名になつた、すなわち水平社運動から葬り去られたはずであるといつた論調を見ることがある。ここでは大阪会議の決議の有効性と、群馬県水平社の決定の有効性について論証したい。

結論から述べれば、有効であろうが、無効であろうが、一九二四年以降も平野の活動にはほとんど変化がなかつたといふことである。南も同様、以前とはほぼ同じように各地を回っている。なぜそのような事態になつたのだろうか。

それは大阪会議を有効とは認めていない人々が多数いたからであろう。前述したような、南を慕う者たちは、処分を不当と感じた。南と平野をともに信頼し、「⁽²⁰⁾」が非人道は責めず、あらゆるせぬ女神の如き委員長を放逐し、やさしい平野兄を地上に投げつけやうとした」と大阪会議に対する不信感を抱いた人々は少なかつたと思われる。

その際に問題とされたのは、たぶん小山紋太郎らの口から各方面へ伝えられたことであろうが、会議の性格の異常さ、決定の強引さであつた。「小山紋太郎氏によれば「松本「源太郎」が死んでいるので松本に同情があつた。上田音市（三重）などは謹慎三ヵ月説だつた。自分は平野の除名はあまりに極端で、辞任が適當であると主張した。すると反対派は辞任しないと平野が言つたらどうするか。この際とことんまで片

付けてしまえということになった」(小山紋太郎氏聴書⁽¹²⁾)という。

「聖戦」に掲載された大阪府下反逆児「委員長会議とはこれだ！」⁽¹²⁾は、筆者は不明だが、出席者の名前をすべて挙げた上で、「変な会議」と紹介している。まず出席者が一部に限られている。南委員長は出席せず、関東はゼロである。しかも当事者の平野は説明聴取なしに退席させられ、下坂正英らは用事で中座、二日目には小山紋太郎・鈴木信・北原泰作は帰郷し、残る一部の者のみで決定された。中央執行委員であるにもかかわらず「栗須君は今まで通りに見做してよいなど、云ふてゐるところを見ると、益々あの会議の精質⁽¹³⁾と云ふものは変なものです」。「あんな会議に巻込まれた真面目な委員長こそ気の毒でした」と述べる。ここにも栗須七郎の問題が出てくるのに注目したい。

問題は、このような情報を信じるか、平野はスパイであるとする青年同盟の情報を信じるかにある。いくつかの地方では会議を主導した青年同盟の主張は信じがたいとされたし、九州では支持された。大阪会議の決議の有効性の有無は、決して全国的統一見解とはならなかったということがある。

関東では大阪会議にひとりも出ていないこともあり、当然のことながら会議の結果を認めなかった。その月の一日、関東水平社の執行委員会が大田町で開かれ、関東一円と長野から集まった執行委員が次のような申合せと決議を行なった。大阪会議の決議は「野心家の奸策に陥りたるもの、如し」で絶対に承認しない、「荊冠旗改正の流言に迷はず飽くまで荊冠旗を尊重すること」⁽¹⁴⁾などである。東海関東の水平社が処分を否認したのは、「平野の活動舞台であり、アナ系の強かった」⁽¹⁵⁾からではなく、大阪会議自体に大きな弱点があったからではないのか。

平野がその後「世良田事件の救済金問題で群馬県水平社からも除名処分となった」と『部落問題事典』にある。このように書かれると、全水からも県水からも除名されたにもかかわらず、勝手に活動していたような誤解を生むので、確認しておきたい。

世良田事件の後の金銭問題・解決方法の問題では、既に述べたように村岡静五郎・栗原積・宮本熊吉らが、平野・沢口忠蔵・川島米治ら青年層から追求を受け(つまり、不正を働いたとされたのは平野ではなく、村岡らの方であり、それは深川武らの調査によっても明らかである)、群馬県の水平社運動はこの時分裂したのである。平野を除名処分としたのは、一九二五年三月の村岡らによる会合(人数的に少数派)であって、平野・沢口らによる会合では平野は世良田事件解決のための特別執行委員に選ばれている。⁽¹⁶⁾要するに、群馬県水による除名も無意味である。平野は水平社から消えるどころか、大阪会議後一月あまり後におこった世良田事件と、その後の運動内の混乱のために、以前よりも忙しくなるのである。

大阪会議から半年余り後の一九二五年七月の第一回中央委員会で専門部委員が選ばれた。平野は入っていないが、その点を吉井浩存は、「その専門部員には旧幹部中痛手を受けて日なほ浅い南梅吉、平野小剣、米田富並に栗須七郎等の名が加へられなかつた」と記している。同時代の記者の頭には、除名された者という認識はなかつたのではないかと思わせる表現である。

(5) 解放連盟創立に平野は関わったのか

アナキズム色を明確にした解放連盟に対する平野の関与については、先述したように従来長く疑われてきた。しかし、解放連盟関係の記事などに平野の名前はまったくない。真相はどうなっているのか。平野は解放連盟には無関係という答えが正しいように思われる。

平野は解放連盟が創立される少し以前（一九二六年初夏）から「満州」と朝鮮へ行くのである。いつ頃日本を発ち、いつ頃帰ってきたのか不明であるが、かなり長期にわたる旅行だったらしい。解放連盟創立以前に帰っていた可能性もあるが、その頃から、従来のような各地へ精力的に演説会に出る姿は資料の上から消える。この時期に何らかの思想的な変化、職務上の変化、または人間関係における変化があったと推測される。

一九二六年九月号の「同愛」に、平野小剣「朝鮮衡平社を訪ねて——鮮滿旅行記の一節——」が掲載された。末尾につけられた日付は八月二〇日。「編輯後記」は平野の原稿について「もう少し長いものが欲しかつたのですが、先生忙しくて書けなかつたのである。少し落付いて暇が出来たら書くと言つてゐますから、やがて次々に君一流の面白い満鮮旅行記が現れる事と思ひます。どうか、あまりほとぼりの冷めない中に書いて呉れ、ばい、がと思つてゐます」と書いてある。

一九二七年五月付、全関東水平社青年連盟本部発行の坂本清作編輯「人類愛」第二輯にも、平野は「関東水平社青年連盟」の肩書きで「朝鮮衡平運動の概観」を掲載した。朝鮮の階級制度や白丁の生活実態、衡平社の創立・衡平社活動の情勢などについて詳しく述べた論文である。書き出しの部分で「私は昨年初夏、京城衡平社総本部を訪れて運動の大略を知ることが出来た。更に衡平運動に関する材料をも蒐集して来た」と述べており、集めた資料をもとに書かれたものであることがわかる。かなりの時間とエネルギーを費やしたのではないかと想像される内容である。

さらに一九三三年の「人類愛」第五輯では、「内外更始倶楽部代表」の肩書きで長文の「支那の排日教育」を掲載している。「編纂者」坂本清作「より」に「支那の排日教育」は解放運動、融和運動とはかなり縁遠きものであるが、日、支の問題の喧しい折柄であるから特に平野氏を

煩はして編述して頂いたものである」とあり、多くの教材・話・歌の例を挙げて、いかに中国で排日教育を行なっているかを紹介している。⁽¹³⁾

こうして平野は、主として朝鮮・中国関係の仕事に従事するようになったと思われる。当時、群馬の植松丑五郎の「国民融和の具体案」では、平野を「水平運動中の支那通として又あまりに有名」と紹介した。⁽¹³⁾一九三四年には「抗日文書、ポスター」の巡回展示会を開催し、一九三九年には中国上海に渡り、一九四〇年死去、葬儀には頭山満の弔辞が読まれたという。⁽¹⁴⁾大陸へ志向するようになったのが一九二六年の初夏、ちょうど解放連盟の創立前の時期だったと推測するものである。

解放連盟の機関紙「全国水平新聞」に掲載された数多くの水平社大会、講演会に平野の名前は一度も出てこない。もしも実際には出席したり黒幕だったにもかかわらず、わざわざ名前を出さないというのであれば、その後も平野とともに行動することの多かった関東の青年連盟のメンバーの名前も出さない方が疑われずに済んだだろう。実際に、平野はまったく関わりがなかったと考える方が自然である。

以後の関東、特に群馬の水平社運動における平野の役割に関しては、一九二七年四月に日本水平社執行委員の肩書きで登場するなど、⁽¹³⁾日本水平社と関東青年連盟の関係があるらしいが、現段階では不明な部分が多く、後日を期したい。

さいごに

今後「アナ派」に関わった人々の活動をさらに解明するには「日本水平社」の問題を避けられないだろう。本論の中でも述べたように日本水平社との関係についてはまだわからないことが多い。特に群馬県に関して不明の点が多く、まだ語れる段階にいたっていない。しかしながら、一つだけ現在予想していることがある。

解放連盟解体の際に深川や朝倉の路線に批判的だった「アナ派」の活動家（白砂春一・岡田光春・小山紋太郎ら）は、一九三〇年以降、特に一九三三年の高松差別裁判闘争において、各地で重要な役割を担って行った。しばらく分裂対立状態が続いて県連の大会が開けなかった広島では、一九三四年四月、五年ぶりに県連大会が開かれ結果がはかられたが、以後「アナ派」活動家は闘争の中心となっていく。部落差別に対する怒りと解放への願いは、「〇〇系」を越えて人をつなぐように見える。そのような姿から感じられるのは、社会運動の諸分野の中でもとりわけ水平運動の分野では、同じ「兄弟」であるという意識が強いのではないかということである。水平運動の中に「派」が存在したのは事実である。しかし「〇〇派」と「××派」の対立的関係を見ると同時に、同じ水平運動を担う者同士の共闘的感情をも重視する必要があるだろう。「日本水平

社」は全国水平社とはまったく別の存在ではなく、両者の間には、同時に両方に参加したりするような曖昧な重複的關係があってもおかしくないと考える。

ところで、資料を集め、並べるといふ作業をしていると痛感することだが、せめて活字印刷の機関紙関係資料と官側の報告書関係だけでも、全体を把握し照合するのに便利なデータ整理とその公刊が必要ではないだろうか。不完全ながらも自分流の整理をしてきたが、今後の研究の蓄積を願うとき、今後同じような作業を繰り返す愚をせずに済む手だてが必要であると考ええる。

さいごに、多くの方々のご厚意によって集めることができ、整理も済んだ資料の大部分を、今回は割愛せざるを得なかったことが残念である。特にそれらの資料には、若いアナキストたちの自由で放浪的な生活など、面白いものが多い。別の機会に利用するつもりである。

- (1) 「アナ派」という語はかなり曖昧な言葉である。本稿では「アナキスト」を、解放連盟・黒色青年連盟など、明確にアナキズムを掲げる集団に仲間意識を持つ者を指して用い、「系」派」はやや広く用いている。
- (2) 秋定嘉和「水平運動におけるアナ・ボル対立について」部落解放研究所編『水平社運動史論』解放出版社、一九八六年所収、四〇～六六頁。『部落解放史ふくおか』第一〇号、一九七八年二月所収の同題名論文に補訂したものである。
- (3) 松浦利貞「水平社運動とアナキズム」『東京部落解放研究』第二九号、一九八二年三月所収、七八～九三頁。
- (4) 白石正明「初期水平運動とアナキズム」『京都部落史研究所紀要』第九号、一九八九年三月所収、一五～四〇頁。
- (5) 秋定嘉和前掲論文、四一頁。
- (6) 秋定嘉和前掲論文、五六頁。
- (7) 秋定嘉和前掲論文、六六頁。
- (8) 埼玉・M・水平社「刑冠旗の改正などと／新聞宣伝は誰だ？」(『自由』第二巻第一号、一九二五年一月)は、関東の水平運動に関する新聞記事はデータが多いと指摘している。
- (9) 警保局「最近ニ於ケル水平運動」一九二七年一月(『特高警察関係資料集成』第一二巻、不二出版、所収)一〇頁によれば、この時が第一回の大坂会議で、一九二五年三月一〇日に第二回、四月三日に第三回となっている。第三回会議で第一回の委員長長問責決議を取消し「関係責任者は第四回全国大会」(五月の七日八日)に於て自発的に勇退せしむるを可とするに一致せり(一六頁)。という「大坂会議」の名称は他の資料にも頻出する。南が京都に招集した会議が「京都会議」、名古屋に招集した会議が「名古屋会議」である。
- (10) 『自由新聞(静岡)』第一号、一九二五年六月、四～五頁。代理は静岡の小山紋太郎。辻本晴一(埼玉)・川島米治(群馬)・沢口忠蔵(群馬)のうちの一人を選出の予定。この三名はいずれも平野小剣とともに世良田事件以後を闘ってきた若い活動家である。

- (11) 前掲の警保局「最近ニ於ケル水平運動」一九二七年一月、二四頁に五月七日・八日の大阪における全水第四回大会の二日目の午後に、大会出席の青年水平社員四名が集合して、本部を名古屋におくこと、「自由新聞」を発行することなどを決めたとある。小山紋太郎の「全国水平社解放連盟解体に就いて」(一九三〇年五月発行、「東京部落解放」第三〇号(一九二六年六月)に解説付で収められている)にも同様のことが書かれている。大会中に独自に集りを持つた可能性がある。
- (12) 『自由新聞(静岡)』第一号、一九二五年六月、五頁。傍点は三原による。
- (13) 『自由』第二卷六月号、一九二五年六月、「社会進化和青年の使命」より。
- (14) 復刻版『自由人』別冊(一九九四年、緑蔭書房)所収、三二頁。
- (15) 吉井浩存の「水平運動発達史」(『水平社運動一九二〇年代』所収)四八六頁。
- (16) 『自由新聞(静岡)』第六号、一九二五年二月、一頁。
- (17) 『旧協調会資料』と『融和事業年鑑』、吉井浩存「水平運動発達史」(いずれも『水平社運動一九二〇年代』所収)、警保局「最近ニ於ケル水平運動」一九二七年一月(前掲)、「同愛」第二九号、一九二五年二月、二二頁。
- (18) 『同愛』第三三号、一九二六年四月、二二頁。
- (19) 八月一九日川崎水平社の青年連盟創立(『自由新聞(静岡)』第四号、一九二五年九月)。
- (20) 九月二七日埼玉大里・比企青年連盟創立発会式兼大里比企連合秋季大会(『自由新聞(静岡)』第六号、一九二五年十一月)。弁士は平野小剣・小山紋太郎・高橋くら子・長谷川黒流「おそらく長谷川武・清水弥三郎ら。
- (21) 一〇月一七日東七条で青年連盟座談会(『自由新聞(静岡)』第六号、一九二五年十一月)。
- (22) 一二月二三日愛知県水平社執行委員会及び青年連盟委員会の声明書「我が愛知県水平社及び愛知県水平社青年連盟は如何なる政党政派にも関係なく今後も参加せず」(『自由新聞(埼玉)』第一号、一九二六年一月)。
- (23) 一九二六年一月一八日下関水平社の協議会「青年連盟の烽火」(『自由新聞(埼玉)』第二号、一九二六年二月)。
- (24) 四月一八日加佐郡青年連盟創立大会(『自由新聞(埼玉)』第四号、一九二六年五月)。
- (25) 「水平運動のノ二大分裂／＼青年連盟を設立し／＼急進派と穏和派に」(『時事新報』一九二六年四月二六日付、「東京水平社関係資料集成第一輯(新聞・機関紙)」所収、二九頁)は、この分裂は関東のみならず全国にひろがりそうだとしている。
- (26) 平野小剣・小山紋太郎・北村庄太郎・菱野貞次・鈴木信ら二〇余名。(『自由新聞(埼玉)』第二号、一九二六年二月)。「同愛」第三三号、一九二六年三月、三二頁。青年連盟の今後の方針について、全国戦線統一の件などを協議。
- (27) 『水平社運動一九二〇年代』(原資料「同愛」)三三二頁。
- (28) 『水平社運動一九二〇年代』(原資料「旧協調会資料」)二八二―三二四頁。
- (29) なおこの大会には東京のアナキストも出席、「東京より望月(桂)、武、後藤三君がそれに出席した」と報じられている(『黒色青年』第三号、一九二六年六月、「消息」)。

- (30) 「水平社運動一九二〇年代」(原資料「旧協議会資料」) 三二二頁。
- (31) 京都府水平社XY生「融和連盟の手先きを警戒せよ……/南梅吉と純水平運動に就て」は、平野と南が会合の黒幕であると述べる(「水平新聞」第一〇号、一九二六年九月)。
- (32) 「大阪朝日新聞」一九二六年八月二十九日付「荆冠旗の下に/全国有志参集し/静に協議をした」、「神戸新聞」同日付など。
- (33) 筆者は「住吉水平社と純水平運動」(「ひょうご部落解放」第四七号、一九九二年六月)では、会合の性格について「不明の点が多々あり解明は今後に期したい」と書いた。
- (34) 玲瓏生「尖端想」(「同愛」第三八号、一九二六年一月)一五頁。
- (35) 小山紋太郎前掲書、一一〇頁。
- (36) 一九二六年九月発行の「全国水平新聞」創刊号。なお、かつての「自由新聞」支局にあった群馬が消えているが、一九二七年五月一日開催の「第六回全国水平社大会開催地変更運動全国協議会」には群馬も参加している。一九二八年五月二六日の「第七回大会不参加共同声明書」では兵庫がなく、群馬・三重が加わっている。
- (37) 小山紋太郎前掲書、一一〇―一一二頁。
- (38) 一九二六年一月一六日東七条水平社解放連盟創立大会(「全国水平新聞」第一号、三頁)。「自由連合」(第七号、一九二六年二月、「京都市印刷工組合/水平社解放連盟演説応援す」)によると、「京都府水平社は十一月十五日の大会に於て自由連合派と中央集権派と分裂す、自由連合派は直ちに水平社解放連盟として翌十六日夜東七条郷の町西方寺に於て創立大会を開く、忽ち警官隊と衝突し京印組合員十名検束さる、負傷者一名」とある。
- (39) 六月二十九日山口県水平社解放連盟創立大会、七月一六日広島県水平社解放連盟創立大会、七月二五日大阪府水平社解放連盟創立大会(以上三件は「全国水平新聞」第二号、一九二七年八月)。
- (40) 四月四日海部郡水平社第二回大会、四月一七日長野県水平社第四回大会、四月三〇日入間郡水平社創立大会(以上三件は「全国水平新聞」第二号)。四月四日群馬県水平社大会(「全国水平新聞」第三号、一九二七年九月)。
- (41) 一九二六年一月の「第三回関西労働組合自由連合大会」で「水平運動に関する件/福島君(京印)水平社解放連盟と積極的に協同戦線に立つことを述べ満場一致可決」(「自由連合」第七号、一九二六年二月)。同年同月「江東自由労働者組合」「守下君京都水平社大会と関西自由連同大会とに出席すべく出立す」(「自由連合」第八号、一九二七年一月)などの記事が見える。一九二七年一月一九・二〇日全国自連第二回大会では「全国水平社解放連盟の山岡君」が意見を述べ、大阪合成組合を非難した(「自由連合」第十九号、一九二七年二月)。一九二七年三月一七日の全国自連第二回続行大会では、関西水平社解連、愛知県水平社から激励文が届き、水平社解連を代表して長野の高橋くら子、関西水平社解連を代表し白砂春一が祝辞を述べた。
- (42) 小林文美「東京水平社の活動」(「水平運動史の研究」第五卷所収)四五二頁。
- (43) 「水平新聞」第二七号、一九二七年二月、「群馬県部落解放運動六〇年史」一六五頁。「同愛」第四〇号、一九二七年二月の二〇―二二頁と三六頁。
- (44) 坂本英雄「思想的犯罪に対する研究」(司法省調査課「司法研究」第八輯六、一九二八年二月、「水平社運動一九二〇年代」所収)四九七―四九八頁。
- (45) 「全国水平新聞」第一号、一九二七年七月、三頁、「全国大会延期となる/労農党支持一派の策動に反対し/開催地変更運動全国協議会生る」

- (46) 長野の成沢は一月二日に小県水平社創立大会で「全国水平社解放連盟支持の件」を可決した際に登場する小県の成沢富太郎と推定する。
- (47) 『全国水平新聞』第三号、一九二七年九月、三頁。
- (48) 小林文美前掲論文、四五―一頁。「平野とは一応訣別」とある。
- (49) 慶應義塾大学部落問題研究会『部落問題』四号、一九五八年十二月、五六頁。
- (50) 『水平社運動一九二〇年代』(原資料「融和時報」第三卷第一号)、三五―四頁。
- (51) 『水平社運動一九二〇年代』所収、三八〇―三八二頁。声明書に名を連ねるのは「県水平社連合会」が広島・愛知・岐阜・静岡・東京・長野・京都・群馬・埼玉、[「県水平社連合会有志」]が山口・大阪・三重である。
- (52) 『水平社運動一九二〇年代』(原資料「融和事業年鑑」)三七九頁。
- (53) 大阪側の『黒色運動』創刊号(一九二八年八月五日、二頁)は府県代表者会議について、「関東水平社長野水平社の無定見なる合流によつてあつて終つた。そして新役員の中に解放連盟系の人々も加はつたりしてゐる」……「関東長野の人々が関西解放連盟の意見を無視してしまつた。関西側の人々は決然とこの会場から帰散してしまつた」と報ずる。ここで言う「関東長野の人々」とは深川武と朝倉重吉である。
- (54) 古賀誠三郎(大串夏身)『いばらと鎖からの解放』一九七八年、八三頁。
- (55) 拙稿「一九三〇年代のアナキズム労働運動(上)―合同と日本無政府共産党」『労働史研究』第三号、一九八六年一月、七七頁を参照されたい。
- (56) 小林文美前掲論文、四五―四五二頁。
- (57) 『水平社運動一九二〇年代』(原資料「旧協調会資料」)五五九―五六〇頁。
- (58) 『全国水平社／関東代表者会議々事』『社会運動通信』第八四号、一九三〇年一月一日(『東京水平社関係史料集』一九七七年所収、一一八―一二〇頁)。「戦線統一の一九三〇年を前に陣容を整へた／関東地方代表者会議」『水平新聞』第三号、一九三〇年二月。「特別高等警察資料」第五分冊、一九二九年二月分、一二六―一三〇頁。
- (59) 『全国水平社大会に対する／関西解放連盟の態度』(『自由連合新聞』第四一四号、一九二九年一月、三頁)。
- (60) 『水平新聞』第二号、一九三〇年一月。
- (61) 小山紋太郎前掲書、一一二頁。
- (62) 『昭和四年の社会運動の状況』一〇七七頁。
- (63) 「頓死か更生か／長野県水平社／幹部共の政治運動参加で近く分裂せん」(『自由連合新聞』第四一四号、一九二九年二月、三頁)。
- (64) 「荆冠旗社更生」(『自由連合主義』第一卷第三号、一九三〇年七月)。
- (65) 吉井浩存「水平運動発達史」(前掲)四七七頁。
- (66) 『水平社運動一九二〇年代』(原資料「旧協調会資料」)一一一―一一三頁。
- (67) 吉井浩存「水平運動発達史」(前掲)四七六―四七七頁。
- (68) 『東京朝日新聞(群馬版)』一九二四年一月二二日付(『群馬県部落解放運動六〇年史』一九八二年所収)九三頁。

- (69) 京都K S生「嘲笑、漫言」(「聖戦」第二号、一九二五年一月)二〇頁。
- (70) 「自由」号外、一九二五年三月。
- (71) 荆冠生(小山紋太郎)「全国水平社第四回大会記」(「自由新聞(静岡)」第一号、一九二五年六月、四頁)。
- (72) 「事實は事実として/報道する!」南氏と栗須氏の暗闘」(「自由新聞」第三号、一九二五年八月、四頁)。
- (73) 「水平運動史上の/一大汚辱/栗須七郎氏を葬れ」(「新聖潮」第一五号、一九二六年一月、二頁)。
- (74) 平野「青年同盟に対する意見」(「選民」第八号、一九二四年九月、七頁)。
- (75) 「水平社運動一九二〇年代」(原資料「融和事業年鑑」)一二六頁、(原資料「旧協調会資料」)一四六一一四八頁。
- (76) 「水平社運動一九二〇年代」(原資料「大正一四年労働年鑑」)一五六頁。
- (77) 「水平社運動一九二〇年代」(原資料「旧協調会資料」)二〇三頁。もし当時の典型的なアナキストであれば、選挙権の自由な行使よりも選挙権の非行使を主張したであろう。
- (78) 「水平社運動一九二〇年代」(原資料「同愛」)二五二頁。
- (79) 本田豊執筆、部落解放研究所編「部落問題事典」一九八六年。
- (80) 渡部徹執筆、部落解放研究所編「部落問題事典」一九八六年。
- (81) 青木孝寿「近代部落史の研究—長野県の実体像」一九七八年、九〇頁。青木孝寿「長野県の水平運動」(「信州白樺」第二六号)一九七七年七月、八〇頁。
- (82) 「新愛知」一九二六年一〇月一四日付(松浦国弘「資料愛知県水平社結成前後の県下未解放部落の状況—新愛知・名古屋新聞を中心として」(「愛知学院大学論叢—般教育研究」第二〇巻第二号、第三二巻第三号、一九七二年二月—一九七五年三月、所収)六—一五頁)。
- (83) 松浦国弘前掲論文、(五)七頁。
- (84) 全水解放連盟結成について、例外的に、古賀誠三郎は「平野らは関東で独自に関東水平連盟を結成」と平野が無関係であることを示している。古賀誠三郎(大串夏身)前掲書、四九頁、五四頁。
- (85) 宮崎晃前掲書、二九頁。
- (86) 秋定は注記で、「アナ派のメンバーに入っていないことを根拠とされているが、しかし、思想的影響や交友関係からしてアナ派に属するといわれても当然ではないかと思う。この論議でいうならボル派とは日本共産党入党者か、ボル派的著作がないと言えなくなるだろう」と述べ、「本稿は、アナ派宮崎晃の遺業『差別とアナキズム』(一九七五年)に刺激をうけているが、そのアナ派擁護は批判されたボル派の裏返し側の側面もあり、したがって本稿はそれに対する是正的意味をこめている」(秋定前掲論文、五七頁)と書いている。また桐村彰郎も同意して、「秋定論文の指摘するように、平野非アナキスト説や、アナ派全面擁護論という難点は免れたい」(「水平社運動研究の状況」、小林茂・秋定嘉和編「部落史研究ハンドブック」雄山閣、一九八九年所収、一二六頁)とし、松浦利貞もまた秋定の指摘に同意している(松浦利貞前掲論文、七九頁)。
- (87) 農民文学者犬田卯らは、本人が自分の主張をアナキズム思想でない、と否認し、周囲がアナキズム陣営の一員と認めていた好例であろう。今までアナキズム思想の諸相については、「農本のアナキズム」と石川三四郎(「日本教育史論叢」一九八八年所収)などで、論じてきた。

- (88) 近藤憲二「日本アナキズム運動史」(一)〔旬刊平民新聞〕第二九号、一九五二年九月二十五日、(近藤「日本アナキズム運動史(大正編)」(二)〔クロハタ〕第四号、一九五九年八月一日)も同文である。
- (89) 「信友会の戦士」(『労働運動』第二号、一九一九年十一月)七頁。信友会の水沢辰夫も「信友会に入会する以前から、立憲労働党(党首山口正憲)の党員で熱心に普通選挙運動に尽力していた」と語る(水沼辰夫「明治・大正期自立的労働運動の足跡」、一九七九年、JCA出版、八八頁)。
- (90) 「自由」第一巻第四号、一九二四年十一月、二三頁。
- (91) 木下浩「平野重吉(小剣)略年譜」『新潟県部落史研究』第三号、一九八〇年、四五頁。
- (92) 以下、庄司吉之助に関する引用は庄司吉之助「平野小剣と私」(『新潟県部落史研究』第一号、一九七八年、五〇八頁)より。
- (93) 本田豊「婦人水平社運動の研究——関東婦人水平社を中心に——」(『東京部落解放』第二九号、一九八二年三月所収)七六頁。
- (94) 堺利彦「水平社大会の印象」(『改造』一九二四年四月号)、『水平運動史の研究』第二巻資料篇上所収(二二二頁)。
- (95) 在京清風生「純水平運動／筆殺者を葬れ」(『中国評論』第二二二号、一九二五年一月一日)。
- (96) 「座談会・水平社の生れるまで」(『部落』第一八八号、一九七二年七月、三六頁)。
- (97) 「水平社の中心人物表(一九二二年)」「水平社運動一九二〇年代」(原資料「旧協調会資料」三二―三三頁。なお、同資料ので平野小剣の項には「無政府主義」や「大杉」などのアナキズムにつながる言葉は書かれていない)。
- (98) 拙稿「日本におけるクロボトキンの影響について」『労働史研究』第五号、一九九一年を参照されたい。
- (99) ジョン・クランプ著、碧川多衣子訳「八太舟三と日本のアナキズム」(一九九六年、原著は一九九三年発行)参照。ただし、クランプは八太舟三が広島から上京した時期を一九二四年九月とするが(邦訳七五頁)、筆者は翌年夏と推測している。
- (100) 「Hさんの話―反逆と自由を求めて」(広島市尾長町協和会発行「轍」、一九八六年所収、二七六―三〇五頁、「Hさん」は和佐田芳雄)。また広島県立公文書館所蔵の「山木茂文書」に、和佐田芳雄を含む戦前の活動家からの聞き取りの記録ノートが多数保存されている。山木氏の著書に用いらなかった話も多く、広島におけるアナキズム系運動に関する貴重な資料である。参考にさせていただいた。
- (101) ネン・K「新堂の兄弟に贈る!」『民衆の中へ』第一号、一九二八年四月。
- (102) 太田友晴談「太田友晴さんと部落解放運動のあゆみ」『富田林における差別と人権の歴史』Ⅰ、八〇頁。
- (103) 「労働運動」第一号、一九二三年二月、七頁の「支局から」に、ふたりが「軍資金の掻き集め中だ」とある。「掠」とは、戦前の一部アナキストが生活手段を奪われた状況の中で、運動資金を得るために自分たちで発行する新聞雑誌への広告取りのような行為によって企業等から金銭を得たことをいう。
- (104) 三好文庫の「水平社幹部調」より。
- (105) 富田林解放会館で見せていただいた。一九八一年八月に地区で作成されたもの。
- (106) 山谷二三「河内水平社の同人たち」(初出は『解放新聞大阪版』一九八〇年、『富田林における差別と人権の歴史』Ⅲ所収)八七頁。
- (107) 豊中部落問題研究会編「苦闘する人間像——水平社同人の日記——」一九七三年、一〇〇頁、今西弥之助の日記である。
- (108) 「黒色青年」第五号(一九二六年九月)第七号(同年十一月)。私家版『望月辰太郎追憶集』一九七二年所収の各回想記。

- (109) 小松龜代吉「望辰こと望月辰太郎さん」『望月辰太郎追憶集』所収、三〇頁・三二頁。
- (110) 小松龜代吉「想い出の人々」『小松龜代吉追悼 反逆頌』所収、一九〜二〇頁。
- (111) 林 丈一「四十年以上のおつきあいから」『望月辰太郎追憶集』所収、一四九頁。
- (112) 林 丈一「四十年以上のおつきあいから」『望月辰太郎追憶集』所収、一五四頁。
- (113) 水野綏茂「弱者の味方だった望月ちゃん」『望月辰太郎追憶集』所収、六四頁。埼玉県で活動したもうひとりの「望月」に、小作人社の望月桂がいるため、しばしば望月辰太郎が小作人社同人と混同されるが、望月辰太郎と望月桂は別人物である。
- (114) 長野県の特高の一九二六年の報告、長野県庁文書「事務引継書」一九二七年、青木孝寿前掲書所収、一六二〜一六三頁。
- (115) 宮崎晃前掲書、一七三頁。
- (116) 平野小剣「大正十三年を送るに際して」『聖戦』第三号、一九二五年一月、五一頁。
- (117) 「埼玉県部落解放運動史」一九八四年、一二二頁。
- (118) 宮崎晃前掲書、六一頁。
- (119) 吉井浩存「水平運動発達史」(前掲)四七九〜四八一頁。
- (120) 「静岡だより」(「自由」第二巻第一号、一九二五年一月、四頁)。
- (121) 宮崎晃前掲書、六一頁。
- (122) 大阪府反逆児「委員長会議とはこれだ！」(「聖戦」第二号、一九二五年一月、二四〜二六頁)。
- (123) 局「最近ニ於ケル水平運動」一九二七年一月(『特高警察関係資料集成』第二二巻、一六一〜一七頁)。ちなみに、大阪会議には九州から松本治一郎・花山清・岩尾家定が出席していた。
- (124) 「関東水平社委員会」『聖戦』第二号、一九二五年一月、二六〜二七頁。
- (125) 古賀誠三郎(大串夏身)前掲書、四八〜四九頁。
- (126) 「自由」第二巻第二号、一九二五年三月、一四〜一五頁。
- (127) 吉井浩存「水平運動発達史」(前掲)四八五頁。
- (128) 「同愛」第三七号、一九二六年九月。
- (129) 坂本清作編「人類愛」第二輯、一九二六年五月、二〇二頁。
- (130) 坂本清作編「人類愛」第五輯、一九三三年八月。
- (131) 植松丑五郎「国民融和の具体案」一九三三年(『群馬県部落解放運動六〇年史』(前掲)所収、二〇二頁)。
- (132) 木下浩前掲論文。
- (133) 「上毛新聞」一九二七年四月六日付(井田安雄「群馬県における水平運動」『水平運動史の研究』第五巻所収、四二六頁による)。